

ほら話と
ほんとう
の話、
ほんの
十ほど

アラスター・グレイ著
高橋和久訳

白水社

TEN Tales Tall & True
Alasdair Gray

訳者略歴

1950 年生れ

京都大学文学部卒業

英文学専攻

東京大学文学部教授

主要訳書

J. G. バラード「太陽の帝国」「女たちのやさしさ」

ジョン・バンヴィル「ケプラーの憂鬱」

グレアム・スウィフト「この世界を逃れて」

E. M. フォースター「果てしなき旅」

ほら話とほんとうの話、ほんの十ほど

1997 年 11 月 10 日印刷

1997 年 11 月 25 日発行

訳者 © ^{たか}高 ^{はし}橋 ^{かず}和 ^{ひさ}久
発行者 藤原 一 晃
印刷所 (株) 三 秀 舎

発行所 101 東京都千代田区神田小川町3の24
電話 03-3291-7811(営業部), 7821(編集部)

株式会社 白水社

振替 00190-5-33228

松岳社製本

ISBN4-560-04644-1

Printed in Japan

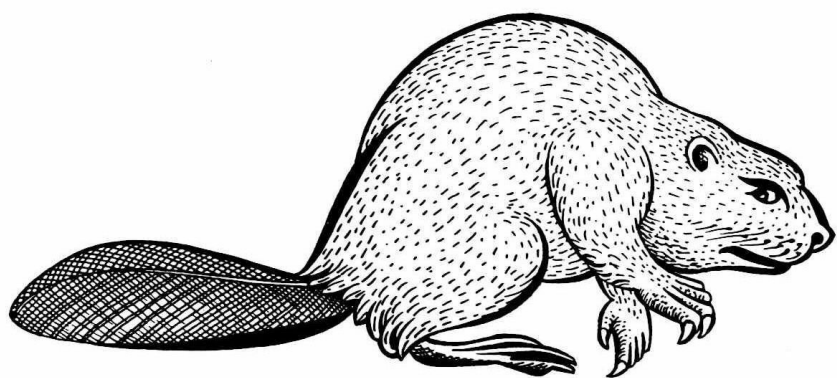
〔R〕〈日本複写権センター委託出版物〉

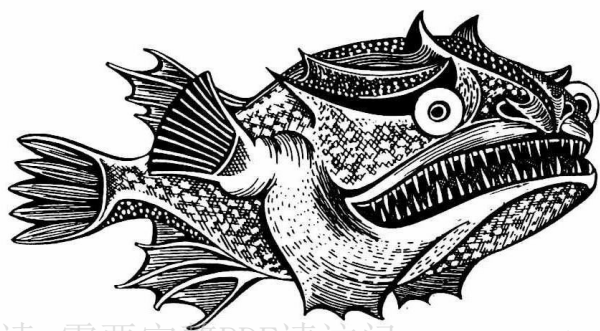
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

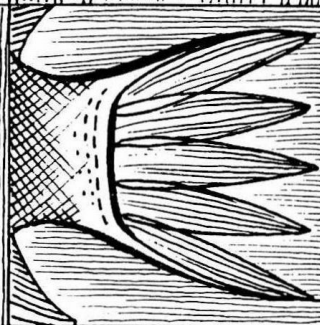
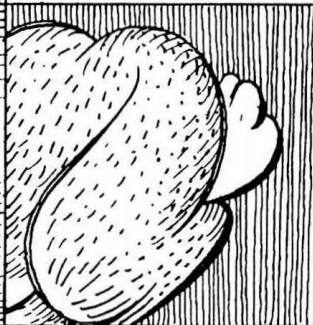
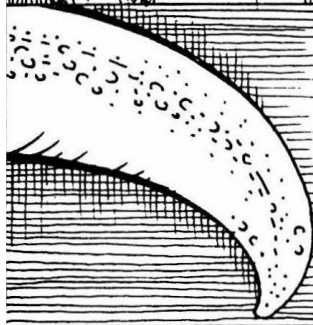
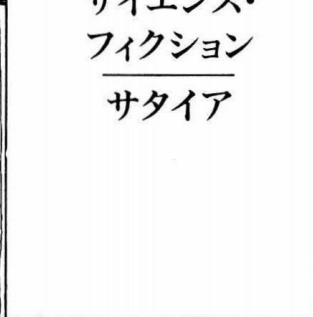
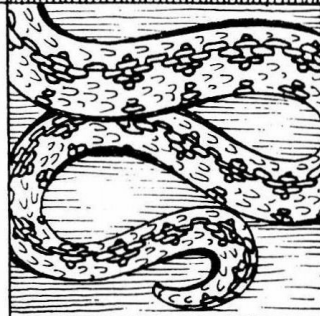
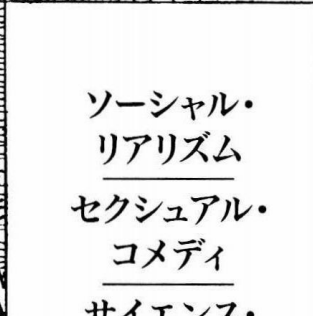
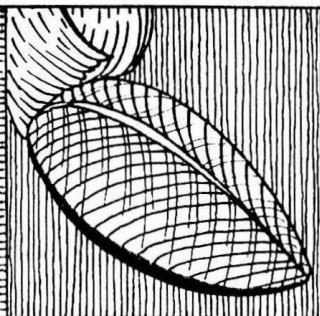
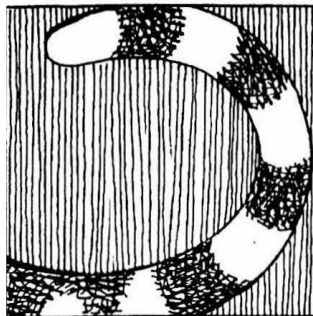
ほら話と
ほんとう

工蘇工業学院図書館の話、
蔵書章 ほんの
十ほど









ソーシャル・
リアリズム
セクシュアル・
コメディ
サイエンス・
フィクション
サタイア



ほら話と
ほんとう
の話、
ほんの
十ほど

アラスター・グレイ 著
高橋和久 訳

白水社

Tokyo 1997

TEN Tales Tall & True by Alasdair Gray

© 1993 by Alasdair Gray

Japanese translation published by arrangement with Alasdair
Gray % Toby Eady Associates Ltd. through The English
Agency (Japan) Ltd.



以下の話の真の生みの親である
トム・マシユラーと
ザンドラ・ハーディと
モラグ・マカルパインに
捧げる

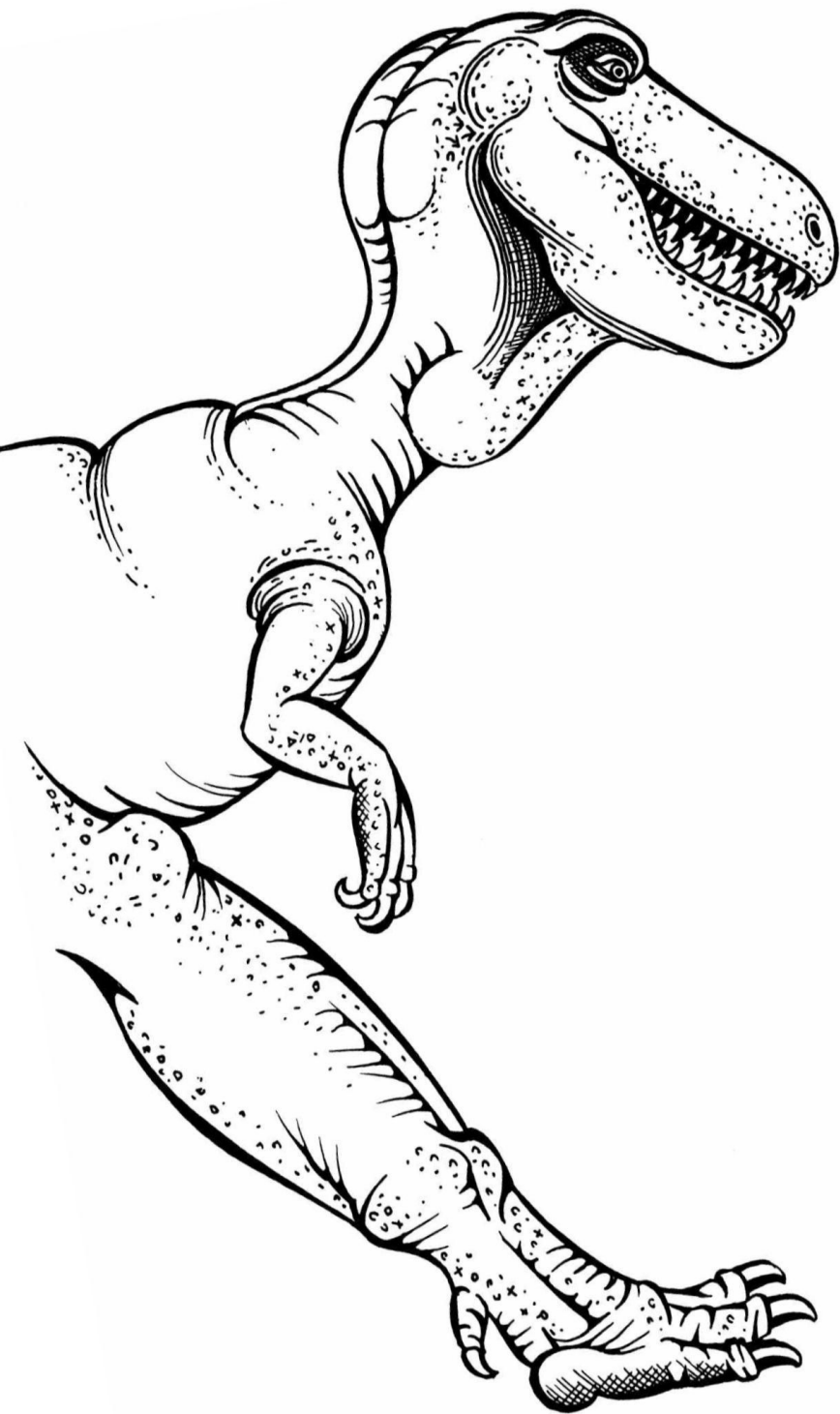




この本は十以上の話を収めているから、
タイトルからしてほらである。



切り詰めたら本が台無しになるし、
ほんとうに合わせれば、タイトルが台無しになる。



始めてみよう——プロローグ



我が名はイシュマエル。イエス涙をながし給う。読者よ、わたしは彼と結婚した。表現の力強さが流れを妨げている。

始まりはすべてが飛翔と落下の連続、正しい動きと間違った動きのちょっとしたシーソーゲームであつたと記憶している。これでは曖昧にすぎる。

わたしは、鈍感で想像力に欠ける上品さを持っているおかげで、どんなときにも、他人にとって頼りになる道具としての役割を果たしてきた一族の末裔である。しかしわたしはごくごく幼少のときから、意地っ張り、途方もない気紛れに耽り、御しがたい熱情の虜になるのだ。縛られ疲れ切つて、すねながら母の胸に抱かれるのが一番だと悟るまで。これはあまりにもロマンティック。

男が一人、北アラバマの鉄道の鉄橋に立つて、六メートルほど下の急な流れに目を落としている。両手が背中にあたり、手首が紐で縛られていた。

これがわたしの文体だ。



男

たちが八人、ぬかるんだ十字路のわきに深い溝を掘った。その泥を見て二人の男がイタリアを思い出した。最近の戦争でイタリアに赴いたのだった。二人はイタリアでは知り合いにならなかったが、ともにナポリの近くの十字路に倒れているドイツ兵の死体を見ていた。ただ一人は、それはピサの方に近かったのではないかと思った。この一団が一服するため手を休めたとき、二人はこの点について話し合った。

「ピサじゃねえな。ピサは何キロも離れていたよ」と一方が言った、「あれはナポリだ。あいつ、

なかなか男前だったな。ジークフリートって名前を付けたんだ」

「俺たちのほうじゃ、アドルフって呼んでたぜ。憎たらしい口髭をはやしていたからな」ともう一方、「あいつ、そんなにハンサムが長持ちしたわけじゃねえぞ」

「口髭のことは覚えちゃいねえが、おめえの言うとおりだ。たしかにいつまでもハンサムじゃいられなかった。全身白けてふやけて、風船みたいに膨らみやがった。破裂しないですんだのは軍服を着ていたからに違いねえ。車の往来が激しかったからネズミも近寄れなかったんだろうよ。あの道に出るたびに、誰かがあいつを動かしておいてくれるようにって祈ったもんだが、無理な話さ。いつもあいつはそこにいて、いつも前よりひどくなった姿をさらしていやがる。ついにはトラックが上を通ってきちゃんとあいつを破裂させたんだからな。おめえ、覚えているか？」

「よく覚えているともよ」

「俺たちはあの道に出るたびに、口々に『ジークフリートの奴、どうしてるかな』と言い合っちゃあ、あいつの姿を探したもんだ。すると必ず何かしら見つかるもんさ。もつともしまいにや、脚の骨だかボタンのついた軍服の切れ端だかになっちゃったがな」

沈黙が流れた。歳をとった連中は死について考え、一番若い土方は買いたいと思っているオートバイについて考えた。彼はこの一団のなかで一番若くてオートバイ好きということで通っていた。ここでは誰もが仲間内で通用する何がしかの特徴を持っていた。組頭のミックはアイルランド人で、厳かな声で奇妙なことを口にするということに通っていた。スコットランドの高地地方の出であることを

売りものになっているもの、毎朝二日酔になることで知られているもの、新婚はやはやを通り名として
いるものもいた。二人の退役兵士のうちの一方は戦争の話が売りもので、もう一人は汚い言葉の使い
手として通っていた。また聖書よりも『ぼろズボンをはいた博愛主義者たち』の方がすぐれた書物だ
と考え、いつもこれを他人に貸そうとするコミュニストもいた。もつとも彼らの大部分は学校で書物
嫌いになっていて、ジョー爺さんだけがそれを借りて、少し時代遅れだと言った。コミュニストは
その点について議論したがったが、ジョー爺さんは老人であると同時に寡黙であることによつても知
られていた。一番若い土方はこうした連中といつしよに仕事をするのが好きだった。ただ彼らの会話
に耳を貸すことはほとんどなかった。誰もがこの若者の注意を引きしたがった。みんな覚えていたのだ、
あるいは覚えていると思ったのだ——自分たちも学校出たてで、十六歳でかつこよくて、筋肉が強く
なつてきているから残業労働の負担も苦にならないのが幸せで、そしてまた、父親と同じほど多額の
賃金を稼ぐのがすばらしくて幸せだったときのことを。最低賃金労働者にとつて稼ぐ力は若いときに
頂点に達してしまうのだ。

「イタリア夫人！」話し好きの男が不意に声を上げた、「イタリア娘！^{シニョリーナ} かの女たちはちよいとそこ
いらの女と違うぞ。さて、俺は正しいか、間違っているか？」

「そりやそうだとも、シニョーラときたら段違いだぜ」ともう一人の退役兵士が言った。胸の前の
ところに両手で大きな乳房を型取つてみせる。

「イアン、ちよつといいことを教えといてやろう」と話し好きが一番の若者に言った、「もしイタリ
アに行くようなことがあれば、牛肉の缶詰をいくつか持つていくといい。そうすりゃ、いいか嘘じや